

六花
3



2019

りっかはいくかい

山田六甲

米澤三

鎮

みちのくもけふは建国記念の日
十代目鷹山公へ雪阻む
雪深し井上ひさしの故郷は
宿を辞す融雪水に足濡れて
氷柱入りジントニツクは昼の酒
猪苗代眼下にくるま横滑り
雪深し隧道工事煌々と
雪崩音こんなところに人が住み
裏路地は融雪水に錆びれけり
みちのくの口塞がれて雪しまく
納豆汁雪の御廟に詣で来て

路地奥の氷柱しづくを灯の暖簾
喜多方の角の看板雪風しまき巻まき
同じ食事ものたのめば雪の催もよひかな
目の合うて逃げ腰となるかじけ猫
尾を曳いて滑り込みたる雪鼯
雪深し夜更に湯舟つかふ音
枝折つて膝しびれたる焚火かな
嶺遠く二月七日の名残雪
寒卵割れば艶なす会津塗
深入りもよし雪沓のなけれども
春水のにごり脱ぎつつ鯉の恋

「東野炎・立所見而・反見為者・月西渡」を倭言葉で「ひんがし（ひむかし）の、のにかぎろひのたつみえて、かえりみすれば、つきかたぶきぬ」と訳したのか、ひんがし（ひむかし）のを漢文に直したのか。（おそらく漢文が先だろうが）いずれにしても、凄く訳した人は柿本人麻呂。もう一つ、伏鱒（こは高適（こうせき）作の「田家春望」門出何所見・春色滿平蕪・可嘆無知己・高陽一酒徒」を「ウチヲデテミリヤアテドモナイガ、正月キブンガドコニモミエタ、トコロガ会ヒタイヒトモナク、アサガヤアタリデ大ザケノンダ」と訳した、というより作り直した。（これは以前にも書いた）柿本人麻呂から千年以上を経て井伏鱒二という詩人が現れた。井伏の無頼度が面白く、何も役に立たない情報であるが、芭蕉のいうように文芸は夏炬冬扇に等しけれども云々、こういう遊びも時にはモチベーションを上げてくれる。どの分野にも天才は出るとい話。もう一つ、女性振付師・演出家、I K I K O（水野幹子）は広島県出身で44歳。オリンピック開会式の演出振付にかかわるといふ。凄いことになりそうぞ、オリンピックの開会式が楽しみ。

雪嶺抄

風花

笹村 政子

日溜りにいのち置きたる冬の蝶
硝子戸に寄れば曇りぬ雪催
竹藪の空の揺れゐる笹子かな
美しく翅打ちてより蝶凍つる
凍蝶や何か急かるる思ひあり
下鴨の川の落ち合ふ時雨かな
さつきから気付いてはをり隙間風
風花や蓋に山河のマンホール
在りし日の母のオルガンクリスマス
年つまる漬物小屋に母の影

高華抄

焼芋屋

佐津のぼる

なめらかに鯉すれちがふ小六月
移り来て住み古る隣家実南天
人に知られずま盛りの枇杷の花
炬燵より出てきて背筋のばす猫
冬椿まれに日の射す藪の中
煤逃の戻つて来たる夜更かな
息の洩る笛鳴らしつつ焼芋屋
雑踏にまぎれてよろけ年の市
年忘れ偉丈夫にして泣き上戸
乱雑の机上そのまま年を越す

思ひなし木の立ち上がる松手入

升田ヤス子

芋莖汁舌に溶けゆく生家なる
思ひなし木の立ち上がる松手入
行灯に夜をゆづりぬ花ひひらぎ
糸菊の流れ一筋逆らへる
笹鳴や遠く釘打つ音の中
耳奥に鶉ノ瀬ひびける紅葉寺
冬あたたか堂のスリッパ藁草履
しぐるるや鉄輪かな匂へる馬つなぎ

おもいなしきのたちあがるまつていれ ますだやすこ

思ひなしとは【思い做し】で、「そうで」
あろうと思ひ込む」ことで気のせい。松
手入れをしている途中でも、終えてから
でもいいが、気のせいか手入れの松が気
持的に立ち上がったように感じたので
ある。もちろん定規やメジャーで測った
わけではなく、感覚的に微妙にそう感じ
たのだ。その本人だけの実感は松手入れ
をした経験がなくても想像できる。それ
には技巧も計らいもなく実感を率直に詠
んだことも読者に伝わった。手入れの終
わった松のこざつぱりした、清々しい気
持ちの代弁でもある。

雪卿集 せつけいしゅう

志方 章子

永田万年青

拾ひきし銀杏をもて茶碗蒸し
池巡る桜紅葉のまだ半ば
盆栽の仕上げに入る菊師かな
鷹飛ぶや父在す空なほ高く
小春日や山門不幸の札掛かる
枯葉散る大地幽けき音たてて
いつせいに紅葉吹き込む鯉の池
山茶花の一吹きのみ散りにけり

植込みに紛れて高き帰り花
お辞儀してゆきしマスクの目皺かな
ルミナリエ光る募金の箱のあり
手袋の右手ばかりを失ひし
何もかも捨てるど決めし年の暮
お通夜の後の柚子風呂長かりき
歳末や樂觀主義の漢来る
宅配の女性よく来る師走かな

升田ヤス子

芋茎汁舌に溶けゆく生家なる
思ひなし木の立ち上がる松手入
行灯に夜をゆづりぬ花ひひらぎ
糸菊の流れ一筋逆らへる
笹鳴や遠く釘打つ音の中
耳奥に鶉ノ瀬ひびける紅葉寺
冬あたたか堂のスリッパ藁草履
しぐるるや鉄輪かな匂へる馬つなぎ

藤生不二男

曇天の空にまぎるる冬雲雀
白雲のしんがりに蹤く浮寝鳥
笹鳴の一声ごとに下りけり
涸滝を映し出したる薄日かな
枯蘆に湖の小波の寄せにけり
しろがねの朝となりけり蝶凍つる
枯蘆を双手に抱きて括りけり
陸よりも沖の明るき時雨かな

出口 誠

住田千代子

白熊の耳に帽子のクリスマス
白熊の赤き帽子よクリスマス
福引きのガラガラ響くクリスマス
オードブル二人で分けてクリスマス
足音に不安が横切^{よぎ}るクリスマス
川岸の家に電飾クリスマス
店員も赤き帽子よクリスマス
クリスマス住所・氏名に費しぬ

瓢^{ひょう}の笛まぐれ当たりに鳴りにけり
新聞はきのふの日づけ大根受く
指揮棒に会場の咳ひたと止む
紅葉かつ散る終曲の激しさよ
美濃紙に透けぬて朱き富有柿
石垣に風の筋みせ蔦枯るる
水切つて窓辺に戻す室の花
冬の野にひと筋細き道のあり

善野 行

谷口 一献

さざ波に藪の紅葉の万華鏡
檜の木の向うは冬の日の広場
地下足袋を背戸に脱ぎけり秋の暮
寒菊の畝の向うは里の山
反古重ねたる畝の端菊を焚く
寒 茜 雲 は 太 古 の 蜃 気 楼
日溜りのベンチを猫に取られけり
潮待ちの瀬戸の旭や冬の風

爛熱く前頭葉に沁みにけり
定位置に立ちて刺身と熱爛と
呑み会を数へ日のごと数へけり
呑み会もほぼ半ば過ぎ年暮るる
ぐい呑の底持ち啜る寝酒かな
湯豆腐や胃の腑に落ちて断末魔
折込の分厚くなりて日を数ふ
鼠の音するや鼯の音走る

雪樹集

廣畑 育子

延川五十昭

香煙の日矢に生るる紅葉堂

山門を比丘尼出でゆく菊の風

石垣の大きい寺なり蔦紅葉

猪に野仏の耳欠けてをり

石段の隙間の紅葉色付けり

手捻りの干支並びある年の市

木犀の香る長治公の塚

湯気吹きて花茶ほあを啜る年の暮

野葡萄に連なり継子の尻拭ひ

孫の摘む籠一杯のなすかな

秋空やパラグライダー切り返す

由良助ゆかりの寺に紅葉散る

平居 滯子

田尻 勝子

陵^{みさとし}の濠の発掘日短

狂ひ咲き思い出ばかりの老女かな

発掘の謎の石敷き冬落暉

欲しいものは今でも笑窪十二月

猫の機嫌伺ひに訪ふ年の暮

雪嶺の富山に住みし我の流転

冬紅葉地に還らずに虚空舞ふ

光年の終に到着冬の星

来ぬ人を待つ飲びの聖夜かな

人影の離れし後の吊し柿

湯豆腐の角の崩れや宴果てぬ

初鏡まだまだ可愛い喜寿の我

六^り花^か集^し

3月到着順

大内 幸子

バスに乗り作用の朝霧深くなる
信号に手袋落ちて見ぬふりす
鉢植を納屋へ引きずり暮早し
年の瀬の整理のつかぬ机上かな
立ち止まる二度桜てふ城下町

江見 巖

師走来る再建に時かかる寺
母の手の櫛にかなはぬ木の葉髪
耳当てて冬木の命測りけり
出口より出て行く納屋の柿落葉
退院の数へし母の年惜しむ

蜚雪譚

山田六甲



住田千代子
指揮棒に会場の咳ひたと止む

マスクの目立つ冬場の演奏会で、指揮者台に立つまでざわつきと咳が多かったが指揮者がいざ、指揮棒を立てると、咳やざわめきは一瞬にして止み、シーンと緊張感が場内に走る。その瞬間を詠んだ。

善野 行

さざ波に藪の紅葉の万華鏡

Rこう会（吟行句会）で万華鏡の句を主宰が出したら「すでに行さんが詠んでいる、と皆さんに叱られた。それほどに強烈な印象があった句である。「紅葉の万華鏡」とはさすがである。藪の紅葉が映る池は万華鏡のように手で回せないから風が回してくれるのだ。行作品は芭蕉の弟子榎本其角のよ

うな華やかさがある。夢風撰候補

谷口 一献

爛熟く前頭葉に沁みにけり

『脳科学辞典』によると「運動前野 (premotor area) は、視覚情報を初めとする感覚情報に基づいて動作を構築する過程で中心的な役割を果たす（内外軸）。代表的な例として、手を伸ばして物をつかむ動作や、食べ物を口に入れる動作が挙げられる。運動前野は背側部（背側運動前野）と腹側部（腹側運動前野）に大別される」とあった。さすがに般若湯を愛する人らしく熱爛をしても人体への影響をしっかりと分析しながら味わえる人なのである。熱爛がはらわたにしみ通るのでなく、前頭葉に沁みるのである。さてその熱爛（冬の季語）の作用は眼や手に及び手の動きが緩慢になり始めるのである。